慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大化改新の研究(坂本太郎著, 至文堂發行)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.17, No.3 (1939. 4) ,p.175(515)- 177(517)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390400-0176

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の早世は悲しみてなほ餘りある。（一九三九、二月）（村田武雄）

古代傳承研究　（肥後和男著 河出書房發行）

本書はさきに『日本神話研究』によつてわが神話學界に多くの貢獻をされた肥後氏の近業であつて、前書と姉妹篇をなすものである。たゞ前書が個々の研究の集錄であるに對し、本書はわが神話において重要な地位を占めるスサノヲノミコトに關する一貫した研究であつて、まづ序說において研究態度についてのべ、ついで素戔嗚尊研究からその名義、その誕生、天眞名井に於ける誓約、素戔嗚尊の荒暴、高天原追放、八岐の大蛇、劍、素戔嗚尊の結婚、朝鮮との關係、大國主命に對する素戔嗚尊、後語の諸篇に分ち、この物語の重要な問題をほゞ究めつくし、いたるところ示唆にとんだ見解を提示して讀者を啓蒙するところの多いのは、まことによろこばしいことである。著者の研究態度が神話と歷史との關係を究明すること、神話それ自身の歷史的發達を追尋することであるとされたのは、もちろん正しい態度として肯定されねばならない。たゞ評者は從來の多くの神話研究に對してその方法論上若干の疑問を有するのであつて、それは神話の原初的意義を究明する結果として、その源流にさかのぼり、各要素に分析還元するのは正しい方法ではあるけれども、しかし神話は還元されたる要素のみならず、それを統一綜合した全體としての形式においても意義を有するのではなからうか、もしさうであるとすれば、還元分析する以外に、更に全體としての意義を尋ねなければならぬのではなからうか、また要素に還元してその原初的意義を究めるに當つて、今日の學者はあまり想像をたくましくして、過度の意義を附する弊がないであらうか、卽ち原始人や古代人の意識以上に解釋しすぎる場合があるのではなからうか、また古神話の研究に民族學が利用されるのは最近の新しき傾向としてよろこばしいことであるが、しかしこの際參照さるべき民間の傳承そのものの歷史がまづ考慮さるる必要はなからうか、今日行はれてゐる民間傳承がことごとく神話よりも古い起原を有し、原初的意義を有するとばかりはきめられないのではなからうか、或場合においては中央において神話が固定化した後、それが地方に傳播し、或は派生したり、附會したりすることも考へられるのであるから民間傳承そのものの歷史を十分論證する必要はなからうかといふのである。かういふ疑問は本書においては比較的稀少のやうではあるものの、しかもなほ全く絕無とは言へない憾みがある。しかしこれは偏に評者の不明の致すところであらう。（本文三六八頁、定價三圓五〇錢）（松本芳夫）

大化改新の研究　（坂本太郎著 至文堂發行）

大化改新に關するまとまつた研究が今まで殆んど見られなかつたが、今回坂本氏が之を公にされた事は學會の爲めに喜ぶべき事である。著者はすでに多くの著書もあり、且つ此研究は學位請求の論文であり充分その價値を有するとして各方面に於てそのすぐれた研究を賞讚されてゐるのであつて、此處に再び本書への讃辭

を呈する必要はないと思はれる。然し本書が國史上の重要事件の研究であり且つそのすぐれた研究の結果を得た點より見ても一應の紹介を爲すのが至當であらう。

本書は緒論、改新の原因、改新の經過、改新の結果の四編より成つてゐる。緒論は研究の沿革、研究の範圍、研究の資料の三章に分けられ、附載として假名日本紀及び和銅日本紀について、釋日本紀所引私記の撰述年代、九州地方風土記補考の三編を附してゐる。改新の原因は貴族擅權の弊害、大陸文化の影響、聖德太子の新政、改新の誘因の四章に冠位十二階補遺を附載としてゐる。改新の經過は準備及び端緒、大綱の宣布、實施及び補遺、改新の概括の四章に分け、改新の結果は新制の變遷、新制の確立、改新の影響の三章に附載として修理制私見が附してある。

以上は本書の目次を記したに過ぎないものであるが、之に依てその內容の大略を察することが出來ると思ふ。而して本書が古來世に出た大化改新論の中でその最もすぐれた業蹟を擧げた事は、すでに周知の事であるので、之を再び繰り返すことを避けて、こゝには本書を一讀した際の二三の感じを記すに止める。

著者は緒論に於て、大化改新の研究の沿革を述べ、現代に於ては政治史的、文化史的、社會經濟史的の三史觀より研究されて居るが、津田左右吉博士の研究はこの何れにも屬しない獨特なるものであつて、津田博士の研究は一轉機を爲したものであり、この基礎事實の再檢討に依て初めて正しき答を求め得らるべきであるとしてゐる。これは誠にもつともな事であるが、歷史の研究に際して史料の檢討の必要なる事は言ふまでもないことであつて、史料の分析檢討は事實を把握する爲めに行はれるので之が一つの史觀を爲すものではない。政治史的文化史的又は經濟史的等何れの研究に於ても同樣に事實の檢討が最も重要であることは言ふまでもあるまい。事實を把握する爲めの史料の嚴重なる檢討は何れの史觀に於ても基礎的のものである。只往々にして今までは充分之が行はれなかつた憾があるので、津田博士の研究はこの點に於て、その效蹟を認めらるゝものと思ふ。津田博士の研究は以上の諸史觀に對して新しい史觀を作られたと言ふよりも寧ろ研究上の基礎的な重要問題を解決せんとするにあることは明かであると思ふ。著者は本書の緒論より見れば津田博士的なる研究態度を取られた事と考へられるが、これは研究上の態度であつて、いやしくも史學の研究を志すものは何人も取るべきもので、現在津田博士的の研究を無視して古代を研究するものはないと思はれる。問題は寧ろ著者が如何なる立場に依て歷史事實を理解せんとするかにあるのである。史家の立場を堅持することを念とする著書が、この點に關して尙數言を費し一般讀者に著者の立場を明示されなかつた事は誠に殘念に思はれる。

著者は又緒論に於て、史學研究の基礎を爲す史料の批判を爲してゐるが、これは誠に當を得た事であつて、吾々はこゝに著者の史家としての嚴正なる態度を見ることが出來るのである。その一例を擧ぐるならば日本書紀に關してはその編纂事情より古事記との關係等を述べ、その史料的價値如何については、津田博士松岡氏等の說を紹介し批判して、大體としてある制限の下に日本書紀の記事を肯定すべき事が妥當なることを述べられてゐる。實に穩

健なる態度であつて一般に承認さるべき說であると思はれるが、これも恐らく上代を研究する者にとつては改めて言ふ程の事でなく、著者が「徒なる記事肯定は津田博士前の狀態に後退する」と警戒するまでもなく、著者の書紀に對する態度は最も穩健適切なものとして稱讃を博すると共に、一般史家も多くはかゝる態度を取つてゐることは言ふまでもない事であらう。

著者は改新の原因を記するにあたつて、大化改新以前の社會、政治組織を普通氏族制度とするに反對してゐるのであつて、今まで多くこの爲めに誤解を生じたとなしてゐる。これも一應傾聽すべき說であるが、氏も言つてゐる樣に多くの人々が普通大化以前の時代を氏族制度と呼ぶのは、決してモルガン等の記してゐる樣な嚴格の意味を有するものとは考へてゐないであらう。然し大化以前の社會が氏族制度的諸要素が著しいことはあらゆる方面に於て認められるのであつて、その意味に於てこの時代を氏族制度時代と呼ぶことは妥當の樣に思はれる。而も著者は改新を以て氏族制度を中央集權制度に改革したと言ふことは疑問があると言ふ意味を述べてゐるが、これは如何なるものであらうか。著者が改新の意義を王政復古の國史に顯現したる最初の事象とあると述べてゐる事が一般國史の常識であると共に、氏族制度を中央集權制となしたとすることが最も普通の考へ方である。著者は又改新の性質に關してそれが政治的改革であることを論じ、その社會的改革を輕視するやうに思はれるのも如何かと思はれる。政治的改革は充分なる社會的改革を伴つてこそ意義を有するものであつて、改新の社會的改革の意義を充分認めない事は、その政治的改革を以て舊來の支配系體に支那の制度を與へたに過ぎないとすると同樣な結果に陷るではなからうかと思はれる。

又改新の結果を論ずるにあたつて、普通の國史に於て天武天皇時代を改新反動の時代と見てゐるけれども、著者はこれに反してこの時代を新制發展の時代となし、天武天皇の改新政治發展に御留意になつた事を擧げられてゐるのは、至當の樣に思はれるけれども、それ以前の孝德天皇御半世より齊明天皇時代にかけての御造營、遣唐使派遣、蝦夷征伐等の事件は改新精神に反するものとなし、この時代を改新思想衰退の時代となすのはどうであらうか。これ等の諸事件は改新を行つた人々が國內の改革が一段落をつけたとなし外部にその力を用ふるに至つたと見なすことが出來るけれども、寧ろそれよりも當時の人々が唐に倣はんとしたことがかかる結果になつたと考ふべきで、これ等の事件は當時の人々には改新に反するものではなく、改新を遂行するものと考へられてゐたと見なすべきものゝやうに思はれる。卽ち內外共に改新を完成する爲めにかゝる結果を見るに至つたと爲すのが妥當ではなからうかと思はれるのである。

以上は讀後の二三の印象を記したに過ぎないけれども本書が大化改新研究の最も權威あるものであることには何等の變りがなく、本書に依て改新の研究が一大飛躍を爲した事は史學の研究を爲す者にとつては最も喜ばしい所である。(今宮新)

石門心學史の研究　(石川謙著　岩波書店發行)